

死者の日

2014.11.2

ヨハネ 6・37-40

今年も11月の使者の日を迎え、今日、このミサをささげて今は神のみもとにおられるわたしたちにとって大切な全ての方々のために祈りましょう。例年のように、皆様からお寄せいただいた亡くなられた方々のお名前を祭壇に掲げて、このミサをおささげいたします。このような形でお名前を掲げて祈ることは、一年のうち、今日だけのことですが、ミサのたびごとにわたしたちは、いまや神のみもとで永遠のミサに与っている方々とともに、ここでミサをおささげしているのです。

ミサにおいて、わたしたちは神のいのちによって結ばれた者たちとして、いのちの与え主である父なる神に感謝の祈りをともにおささげしているのです。亡くなられた方々が葬られている墓地にお墓参りするのと同じように、あるいは、もっと身近に、亡くなられた、今は神のみもとにおられる方々とこのミサにおいて結ばれているのです。今日のこのミサを、その方々の気配を感じるようにして共におささげしたいと思います。亡くなられた方々はわたしたちの心の中にいてくださいます。わたしたちがその方々を思い起こすとき、その方々はわたしたちが共に過ごしたあの時、あの時のお姿のまま、あの時の声や表情をもってわたしたちの心を訪れてくださいます。わたしたちもその方々と共にあったときの自分に戻って、その日々の自分を見出すことができます。そのような思いの中で共に生きる者たちとして、神の国の永遠のいのちを先取りするようにして今日のミサをささげたいと思います。

「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。わたしの父の御心は、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである」(ヨハネ 6・39-40)。今日の福音でイエスはこのように保証していただきます。別離の悲しみのうちになくなられた方をお見送りするときも、イエスのこのみことばに信頼を置きたいと思えます。そのような時にこそ、イエスのこのみことばが悲しみに沈むわたしたちを希望で満たしてくれるよう祈りたいと思います。

死と向あわねばならないとき、わたしたちは深い悲しみの中にもありながらも、自分がキリスト者であることをありがたく思えるにちがいありません。わたしたちのキリスト者としての信仰は、イエス・キリストの復活を信じる信仰に基

くものです。その御子イエス・キリストを死者の中から復活させられた父である全能の神はその御力をもってイエスキリストを信じる全ての人を復活のいのちに立ち上がらせてくださいます。これが、わたしたちが信じている信仰です。今日死者の日のミサをささげてこの信仰を強めていただけるように祈りましょう。教会で営まれる葬儀は厳粛な中にも明るさが感じられます。キリスト者ではないご参列の方々にもこの雰囲気を感じられるようです。教会で葬儀を行ってもらいたいとほらすキリスト者ではない方も少なからずいらっしゃいます。このことから分かるように、教会のご葬儀は復活の信仰を伝えるための福音宣教のよい機会となっています。イエスの復活に対する信仰は、わたしたちの国においても魅力的な福音となっていると言えます。

復活を信じる信仰はこの世における苦しみを排除するものではありません。けれどもイエス・キリストの十字架の死と復活を信じる信仰は、どのようなことがあっても、わたしたちから最終的な希望を奪うことはありません。今日の第二朗読のパウロのことばが告げているように、わたしたちにその御子をお与えなった全ての者の父である神の愛からわたしたちを引き離し、浮かぶことない悲しみに突き落とすものはないのです。このような信仰が与えられていることへの感謝をともにして今日のミサをおささげいたしましょう。神のみもとにおられるわたしたちに身近なすべての死者たちがわたしたちの行く手を希望の光で照らしてくださるよう祈りたいと思います。